

たんぽぽ

咲いた

伊佐市の挑戦

①

# 子供の発達療育で伸ばす

「発達障害」

伊佐市の主婦宮ノ前愛子さん(36)はパソコンの画面から目を背けた。「障害」の文字が重くのしかかり、目の前から光が消えていった。

2007年8月10日、次女の瑚都ちゃん(3)が誕生した。黒々とした癖毛は父親似。1歳で歩き始め、すぐに外を走り回った。周囲は「将来はスポーツ選手だね」と期待を込めた。

保育園の入園式。1歳8か月の瑚都ちゃんは何度も椅子から立ち上がり、その度に保育士に連れ戻された。最後は保育士に抱えられ、式を終えた。「ロッカーに閉じこもった」「積み木を投げた」。園での様子を聞くと、宮ノ前さんの不安は膨らんだ。パソコンに気になる行動を



「たんぽぽ」で泡遊びを楽しむ瑚都ちゃん。この2年間で笑顔が増えた

打ち込んだ。「動き回る」「人見知りしない」「言葉が出ない」。検索ボタンをクリックすると、「発達障害」の文字が並んだ。

＊

1歳半健診で、保健師が犬や猫、車など6枚の絵を置き、「ワンワン、どれ」と幼児に語りかける。相手の意図を感じ取り、さらに「できた」とへの共感を求めることができるか。学習能力だけでなく、

内面の育ちをみるための質問だ。

成長の過程には、段階に応じて乗り越えるべき山がある。瑚都ちゃんの住む伊佐市では、乳幼児健診で山の前に立ちすくむ子どもたちを見て、治療的教育(療育)によって山の向こう側に導く「早期発見、早期療育」を掲げる。療育拠点の市子ども発達支援センター「たんぽぽ」には、0～6歳児92人が通う。「遊

## 言葉や生活 早期から支える

びや集団生活を通して、子どもたちの可能性を大きく育てる場所」と堀ノ内真理子園長(48)は位置づける。

＊

ちよこんと椅子に座った瑚都ちゃんが、大好きな揚げ麺をおいしそうにほおばる。たんぽぽに通い始めて、もうすぐ丸2年。「おかあちゃん」と甘えた声で駆け寄る瑚都ちゃんを、宮ノ前さんはぎゅっと抱きしめる。

昨年8月、「自閉症」と診断された。でも、人と遊ぶ楽しさを知り、笑顔が増えた。一歩ずつ山を登る。

中学で美術を教える父親の真志さん(34)は最近、瑚都ちゃんの日常を漫画に描き始めた。タンポポの種につかまって、大空に羽ばたく瑚都ちゃんの姿があった。

＊

10人に1人とも言われる発達障害。乳幼児期に発見されず、必要な療育を受けないまま成人するケースも少なくない。乳幼児期からの早期発見と療育を実践する伊佐市の取り組みを追う。

発達障害 対人関係や感情のコントロールなどの発達が遅れ、社会生活に困難を抱える。脳の機能的な障害が原因とされ、対人関係を苦手とする「自閉症」や、落ち着きがないなどの「注意欠陥・多動性障害」、読み書きや算数が苦手な「学習障害」などが含まれる。文部科学省が2002年に実施した調査では、小中学校における通常学級の児童生徒の6.3%が発達障害とみられるとしている。県は今年6月、「発達障害と疑われる県内の中学生以下の子どものは約1万2000人と推計される」と発表した。